

令和六年五月度 御報恩御講拝読御書

妙心尼御前御返事

建治元年八月二十五日

五十四歳

このまんだらを身にたもちぬれば、王を武士のまぼるがごとく、

子をを親のあいするがごとく、いを魚の水をたのむがごとく、草木

のあめを雨のねがうがごとく、とりの木をたのむがごとく、一切の

仏神等のあつまりまぼり、昼夜にかげのごとくまぼらせ給ふ法に

て候。よくよく御信用あるべし。

令和六年五月度 御報恩御講 『妙心尼御前御返事』 (御書九〇三六、六行目〜八行目)

【通釈】

この御本尊を身に持つのであるから、王を武士が守るように、子を親が愛するように、魚が水を頼みとするように、草木が雨を願うように、鳥が木をよりどころとするように、一切の仏神等が集まって(この御本尊を受持する者を)守り、昼夜を問わず影のように寄り添って守護することは間違いない。よくよく信じるべきである。

【主な語句の解説】

まんだら(曼荼羅・曼陀羅)：梵語マンダラの音写で、功德聚(くどくじゅ)・輪円具足(りんねんぐそく)と訳される。もとは古代インドで壇を築いて諸仏・諸尊を安置したものを言ったが、のちに諸仏・諸尊の集合した図や絵などのことも指すようになった。ここでは大聖人の御図顕された御本尊のこと。仏神(ぶつじん・ぶっしん)：ここでは諸仏と諸天善神のこと。

【背景と大意】

本抄は、建治元(一二七五)年八月二十五日、日蓮大聖人五十四歳の御時、身延において認められ、駿河国富士郡に住んでいた妙心尼へ与えられた御書です。第二祖日興上人による写本が大石寺に所蔵されています。妙心尼について、総本山第六十六世日達上人は、高橋六郎兵衛入道夫人・窪尼(持妙尼)と同一人物であると考証されています。

本抄述作九日前の同じく妙心尼に対する御消息(妙心尼御前御返事・御書九〇〇)等を拝すると、当時、夫が病に罹っており、妙心尼は剃髪して尼となっていたことが分かります。

内容は、御本尊とは「法華経のうちのかんじん(肝心)、一切経のげんもく(眼目)」(同九〇三)であることを教えられています。さらに本日拝読の箇所、御本尊を受持する者の功德を種々の譬えを挙げて明かされており、御本尊を固く信ずるよう励まされてご消息文を結ばれています。

信心を続けていく上において、御本尊に対する絶対の確信が大切であります。御本尊を受持する者は、一切の仏や、諸天善神に守護され、日常の生活のなかで困難に出遭った時、大きな功德を感じることを、お示しになっています。

ますます混乱していく現在の濁悪の世を真に救えるのは、大聖人の正しい教えであり大御本尊の功德しかありません。それだけに、この正法を知る私達僧俗の責務は重大です。『立正安国論』の「唯我が信ずるのみに非ず、又他の誤りをも誠めんのみ」(同二五〇)との御金言を拝し、正義顕揚の折伏に立ち上がり、これが今なすべきことと心得ましょう。

本日は、諸仏・諸天善神が本尊を受持する者を必ず守護するとの御教示を拝しました。困難や苦悩の絶えない世の中ですが、私達は幸いにも、自身を変え、困難を乗り越えられる正しい信心に縁しています。

どうか、このことを深く感謝し、本日の御講を機に、真剣に勤行唱題・折伏に励み、皆で広布前進の歩みを、力強く朗らかに進めてまいりましょう。

法華經の意は純円一実の妙法である。純円一実の妙法とは如何なるものでしようか、

釈尊を始め十方三世の諸仏が人生を達観し、自得された不可思議な「さとり」であります。唯仏と仏とよ

り外に知ることが出来ないもので、到底私たち凡夫には知ることができないのです。

ですから私たち凡夫には唯仏さまの「さとり」御本尊」信受して、之を信解するより外ないのです。仏の教えられた「さとり」とは、法華經方便品に、「仏の成就する所は第一希有難解の法也。唯仏と仏とのみ乃し能く

諸法の実相を究尽し給へり。所謂諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等なり」とあります。

之が法華經の肝心、意であり純円一実の妙法であります。此の「さとり」と言うものは、精神・物質界だけでなく、あらゆる森羅万象を総括している名称であり、私たち人生のすべてを包含するものであります。

諸法の実相である「さとり」とは、真実の相であり、其の真実の相は、仏さまだけが究め尽されて居ると云うことなのであります。

其の真実の相と云ふことを詳しく申し上げますと、凡そ森羅万象には、皆夫々其の相貌があり、相貌があれば、夫々其の性質があり、性質があれば又其の実体がある、実体があれば又夫々其の物の力量があり、力量があれば又夫々其の作用がある、作用があれば、其の作用が因となり縁となりて、又夫々の果を結び報を成就するもので、其の果報を結びますと、其の結びたる処に、又其の物の相貌・性質・実体と云ふものが具はり、其の相貌・性質・実体が具はれば、其処に又力量・作用が現れて、夫が又因となり縁と成り、そこに応ずる果報を成就し、果報を成就すれば、さらにまた相・性・体・力・作・因・縁を生ずると云ふ様に、絶えず循環して互に本末究竟することが、之れ即ち自然法爾の道理であつて、何れより来て何れに去るかも知らず、仏の所為にもあらず、況んや私たちの如何ともすべからざる所、実に不可思議至極の相であります。故に之を妙法と云います。即ち妙とは讚嘆の意味でもありますが、精神・物質界をすべて含む、実に不思議なる妙法なのであります。

法が妙なりと云ふ意味で妙法と云ふのであり、之を経文に「諸法実相・所謂諸法」云々とお説き

之を例ば梅には梅の相あり性あり体あり力あり作あり因縁果報ありて、本末究竟し、松には松、竹には竹、各々夫々の相・性・体等の特色を發揮する所が、妙法の姿であります。之を人間に例ふれば、男は男、女は女、老人は老人、小児は小児、賢者は賢者、愚者は愚者、仏は仏、凡夫は凡夫と、各々その、相・性・体・力・作・因・縁・果・報であり、本末究竟する姿が、純円一実の妙法なのであります。

方便品読誦する意義

宗祖大聖人御出世の本懐とは、我々衆生を修行させることに在ります。

『五人所破抄』に云く(一八八二 九六)

一には借文の為二には所破の為云々、所破の為とは迹門を読んで爾前経を破し、寿量品を読んで在世の迹門を破し、題目を唱えて教相の本迹爾前を破す。借文の為とは、方便品を読んで、寿量品の実義を助顯し、寿量品を読んで正行題目の功德を光顯するなり、委細に述べれば寿量品お顯寿長遠の文を読むは題目の深義を顯さんが為、方便品の在顯実相の文を読むは寿量品の一念三千の法門を光顯せんが為なり。故に迹門なればとて方便品を捨つるは宗祖大聖人の御本意に非ず、

方便品・寿量品を読誦することは此の題目の功德・功能を助顯せん為なり、勸心本尊抄に明らかなり本門寿量文低下種の題目を唱えることは正行にして、法華経第二譬喩品には「塩酢の米麴の味を助く如し」と、題目の意義を正しく補助するために方便品と寿量品を読誦することであると説いています。

《三転読文》

十如是の文を三転して読むことを「三転読文」という。天台大師は義によつて文を読めば三転となることを明かしている。私共がこの方便品を拝読する時『所謂諸法、如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等』の御文の所を三度繰り返すが、これは『空諦・仮諦・中諦の三諦』即ち空諦、仮諦、中諦の夫々に即して十如を觀するためである。

「されば当宗には天台の所釈の如く三遍読むに功德まさるとある」 『一念三千法門』一〇六

朝夕勤行の御経を読む場合は、三返とも「如是相」と、仮諦の読方をするのが適法である。之は現見の諸法に即して、空と、中との義理を立てるのが佛法の建前であるからである。且つ下の偈の文に「如是大果報、種々性相義とあつて、相性の点と用いられてあるのが現證である。且つ又言辭の便宜からいっても、如是相・如是性等と読むと、なごやかに佛事を成就できる感が生ずるからでもあります。

末法の日蓮大聖人の仏法においては、凡夫のありのままの姿、すなわち仮の姿のままの凡夫身に妙法の仏性、仏の当体を顯していくという意義から、天台の三諦読みにとらわれず、如是相・如是性等と、三回とも同じ読み方でよいのである。

ここのとてころをしつかり心得、信を込めて唱題に励むことが大切です。

妙法仏界に冥合してゆく果報の中に、宿命の転換・生命力の湧現・諸天の加護等の一切の功德が具わっていることを強く確信すべきです。

唱題はまことに無上の甚深なる仏道修行そのものである故に、正しく厳格にそして真剣に取り組み、行じなければなりません。

※ 御本尊の仏力・法力はまことに甚深無量です。

譬喩品(新編開結 一七四六)

「この法華経は、深智のために説く。浅識はこれを聞いて、迷惑して解せず。一切の声聞、および辟支仏は、この経の中において、力及ばざる所なり。汝、舍利弗すら、尚この経において、信をもって入ることを得たり。いわんや余の声聞をや。その余の声聞も、仏語を信ずるが故に、この経に随順す。己が智分に非ず。また舍利弗。憍慢・懈怠にして、我見を計する者には、この経を説くことなかれ。凡夫の浅識は、深く五欲に著し、聞くとも解することあたわず。また為に説くことなかれ。」

※ 以心代慧(信心をもって仏道の本因とする)

大聖人様の仏法とは、信をもって慧に変わると言う教えであります。

※ 舍利弗は知恵を持って華光如来なつたのではない。

智慧というものは、一定のものではありません。子供から大人になる間、智慧というものは変化するものであります。大人になってから智慧がどんどん増えてくるか、そうではありません。五十〜六十になると耄碌してきます。しかも、大人になると智慧も変化がある。六十〜七十になって若い者と智慧比べをしてもかないません。たしかに経験上からすぐれているでしょうが、智慧というものは活動・行動が無ければ用を足しません。大智舍利弗も法華経には信を以て入る、其の智分の力にはあらず。

※ 寿量品(新編開結 四三六六)

擣(つ)き篋(ふる)い和合して、子に与えて服せしむ。しかして、この言をなさく、『この大良薬は、色香美味にして、皆ことごとく具足せり。汝等服すべし。速かに苦悩を除いて、また衆の患なけん』と。その諸子の中に、心を失わざる者は、この良薬の色香ともに好きを見て、すなわちこれを服するに、病ことごとく除こり癒えぬ。

と仰せです。又、祈願しつつ唱題するのが謗法であるとも言えません。たとえ発心が真実でなくとも正境に縁するだけでも功德がはなはだ多いからです。

しかしそれは初信の人に対しての御教示であり、信心十年、二十年の人の唱題行としてはあまりにもお粗末に過ぎるでしょう。

大聖人様が「祈り」について御指南される際には必ず「申す」と御教示されておられます。

「ただ嘆く所は露命計りなり、天たすけ給へと強盛に申し候」

(経王殿御返事六八六卷三行目)

「何なる世の乱れにも各々をば法華経・十羅刹助け給へと湿れる木より火を出し乾ける土より水を儲けんが如く強盛に申すなり」

(可責謗法滅罪抄七一八卷 九行目)

「とくとく利生をさすけ給へと強盛に申すならば、いかでか祈りのかなはざるべき」

(祈祷抄六三〇卷 一四行目)

「各々も不便とは思えども助けがたくやあらんずらん、よるひる法華経に申し候なり、御信用の上にも力もをしまず申し給え」

(南條殿御返事九七四卷 三行目)

これ等の御文の如く、祈りと題目を唱えることとは明確に区別しておられます。

「申し」ながら「唱題」することは到底できることではありません。

このことから唱題と祈祷・祈念とは、きちんと立て分けていくべきであることがお分かりでしょう。故に当宗の勤行では四座の観念のところで祈念するのが原則になっていきます。信心は日々月々に強まり成長しなければなりません。

信心のレベルを初信のままにし、ただ題目の数だけを多くして満足しているというのでは、境涯の向上もままならず、宿業の転換、諸天の加護も微々たるものではないかありますまい。六道の欲念からの願望を御本尊にひたすらに祈る祈祷行の唱題を盛大に行って信心強情と錯覚し、本来の仏道修行たるべき唱題行にははるかに及ばぬ域で自己満足している多くの会員の姿を見るにつけ、悲しくなります。まことに勿体ないと思います。

「但在家の御身は余念もなく日夜朝夕南無妙法蓮華経と唱えて候て…」

(松野殿御返事一一六九卷 九行目)

この「余念もなく」に注目しましょう。「信の一念」でないのは「余念」であります。「信」を込めれば「余念」はなくなります。